

東京電機大学高等学校卒業式式辞

本日、ここに東京電機大学高等学校第67回卒業証書授与式を挙行できますことを、心から感謝申し上げます。ただいま、卒業生244名に対して卒業証書を手渡すことができました。

保護者の皆さま、お子様のご卒業、誠におめでとうございます。皆さまには本日まで学校の教育活動に深いご理解とご協力をいただきまして、心よりお礼申し上げます。また、学園、PTA、校友会、同窓会をはじめとするご来賓の皆さまには、お忙しい中をご臨席下さいまして誠にありがとうございました。感謝申し上げます。そして、卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。今日まで皆さんが積み重ねてきた努力を心から讃えたいと思います。

高校卒業にあたり、皆さんの胸中にはさまざまな思いが去来されていることでしょう。楽しかったこと、嬉しかったこと、辛かったこと、悲しかったこと、そのすべてが皆さんの今後の生き方に大きな影響を与えることになるはずです。ですから、今日を節目ととらえて、これからの自分の人生をどう生きていくかを、じっくり考えてみることを皆さんにお勧めしたいと思います。自らの生き方を問うことは、人生において大切なこと、価値あることは何かを考えることに他なりません。

現代の世界は恐らく18世紀の産業革命以来の大きな転換期にあります。転換期とは変化が激しく先を見通すことが困難な時代です。そういう厳しい時代を皆さんは生きていかねばならない。もちろん、どんな時代であっても、生きていくことは何らかの困難をとまなうものです。しかし、これから数十年間は社会も経済も政治も文化も、ある一定の方向に収斂するまでは変化が絶えないと想像されます。そんな時代に生きていくためには、変化に対応できる能力が必要でしょう。変化を読み取る分析力と柔軟な思考力、そして敏速な行動力は、生きていく上で必須の能力だと思います。

皆さんもあと数年のうちには、社会人として何らかの職業に就いて働くことになると思いますが、働き方も今までとはずいぶん違った形になるはずです。新卒で入社してそのまま定年まで勤め上げるという日本型終身雇用制度は、もはや一般的なキャリアとは言えなくなっています。これからは人生において何回かの転職を通じて、自らのキャリアアップを図っていくことがあたりまえになるでしょう。働き方が変われば生き方も変わるはずで、長い人生の中でも職業人として過ごす時間が一番長いのです。18歳のタイミングで働くことの意義を考えておくことは大切だと私は思います。

そもそも、働くこと（労働）にはどんな意味があるのでしょうか。キリスト教文化の影響にある欧米諸国では、労働とは神が人間に与えた罰則であるという考え方が根底にあります。だから仕事を離れた自由な時間は、思う存分に楽しむという発想が欧米の働き方の

根底にはあります。勤勉に働くことに価値があるとされるようになるのは、16世紀の宗教改革以降であり、その結果が近代資本主義社会の誕生につながったと考えられています。

一方、江戸時代の日本では、労働は「家業」や「生業」という言葉でわかるように、自らの属するイエや共同体の生活を成り立たせるための手段という側面が強く意識されていました。また「職分」という言葉に象徴される、士農工商それぞれの身分に割り当てられた役割を果たすことが世間に対する責任であるとする考え方もありました。家族や世間のために働いて誰かの役に立ち、その代価として報酬をいただくという日本独特の労働観・勤労観からも、日本人にとって働くことと生きることは密接に結びついていることがわかります。

ところが、経済活動のグローバル化や労働人口の減少、さらには人工知能の実用化が進む中、日本では働き方が急激に変わりつつあることは先に述べた通りです。資本主義社会である限り、労働の効率性、生産性を向上させて、より多くの利潤を上げることは企業活動の大きな目的に違いありません。しかしそれだけがすべてではありません。社会に貢献し人々の生活向上に寄与することも企業にとっての大切な価値です。その中には当然、働く者の生きがいや幸福な生活の実現も入っているはずですが。

ところで、日本にはそこに働く皆が幸福を感じられることを目標、理念として掲げている会社があります。その会社は皆さんとも大変関係が深い会社です。その会社が作っている商品は教室にごくあたり前にあるものです。何のことか分かるでしょうか。

それは、学校になくってはならないチョークです。日本のチョークのシェアの実に50%を占める日本理化学工業という社員80人ほどの小さな会社です。特徴的なのはそのうちの60人が知的障害者であるという点です。しかもその人たちが製造ラインのほぼ100%を占める生産の担い手であり、50年以上も前から知的障害者雇用を継続している世界でも例のない企業です。日常何気なく使っているチョークが知的障害を持っている人たちによって作られていることを私は知りませんでした。それを知ったのは昨年出版された『虹色のチョーク』という本を読んだことがきっかけです。

この会社が初めて知的障害を持つ二人の少女を雇用した時の話です。毎日誰よりも早く会社に来て、与えられた単純作業を一生懸命こなす彼女たちの姿を見て、経営者である現会長大山泰弘さんは不思議に思います。会社で大変な思いをして働くより、福祉施設で大事に面倒見てもらっているほうがずっと楽で、幸せだろうに。ミスをして従業員から叱られ明日から来なくていいよと言われると、嫌だ、会社で働きたいと泣きながら訴える。知的障害がある人たちが働かせているという後ろめたさも感じていた大山さんでしたが、その疑問を、たまたまある禅僧に投げかけたところ、こんな答えが返ってきたそうです。

人間には4つの究極の幸せがある。それは、人に愛されること、人に褒められること、人の役に立つこと、人から必要とされること。愛されること以外の3つは働くことによ

て得られると教えられ、大山さんは目から鱗が落ちる思いをします。施設で手厚く保護されていてはこの3つを手に入れることはできないことに気づいた大山さんは、「健常でも障害があっても働くことで幸せを感じてもらおう」会社を目指すようになったのだそうです。

日本理化学工業は私たちに教えてくれます。人は誰かのために役に立つことに喜びを感じる。人から必要とされることによって自分の存在意義を確認し、プライドと責任感によって幸せを感じる。働くこととは、即ち人も自分も幸せになることだということを。日本国憲法第27条に「すべて国民は、勤労の権利を有し、義務を負う」とあるのは、働くことの意義の本質を述べていると解釈されるべきと思いました。

日本生産性本部が毎年実施している新入社員1,300人を対象とした「働くことの意識」調査の結果によると、「働く目的」への回答で多いのが「楽しい生活をしたい」や「経済的に豊かになりたい」であり、これに対して平成以降増加傾向にあった「社会に役立つ」がここ数年でかなり低下してきているそうです。もちろん、お金に不自由なく楽しく暮らせることに越したことはありません。しかし、それだけでは本当の意味で価値ある人生、豊かな生き方とは言えないのではないかと。『虹色のチョーク』を読んで、そんなふうに思いました。

皆さんが実社会へ出て行かれるまでには、まだ間があります。さまざまな見聞、経験を通じて、人の役に立つことや必要とされる経験を積んでおいて欲しいと願っています。

それでは、卒業生の皆さんの前途が輝かしいものになることを心から期待して、式辞とさせていただきます。卒業おめでとう。

平成30年3月10日

東京電機大学高等学校
校長 大久保 靖